

学びのハードルを下げるには…？ ～大人になっても学び続ける環境作りを考える～



開催日時：2022年10月29日（土）10:00～11:30 実施形態：Zoom

参加者数：9名（運営メンバー含む）

話題提供者：深澤まどかさん（シブヤ大学）

コーディネーター：浜田未貴さん

趣旨説明

今回は、大人の学びの場とは何かというテーマのもとに、「渋谷」というまちを舞台に活動されている深澤さん（シブヤ大学）をお招きしました。シブヤ大学の実践や深澤さんのご経験をもとに、「人が参加したいと思う学びの場とは何か」、「それが持つ意味とは何か」、そして「大人になっても学び続ける環境をどのように作るのか」という点について考える機会になりました。

話題提供：深澤さんのご経験とシブヤ大学での実践

大学で都市計画・まちづくりを学び、3年半前からシブヤ大学で正規職員としてご活躍されている深澤さんですが、今の活動の原点には主に二つのご経験がありました。一つは、ご家族が営む宿泊施設でたくさんの大人の方（宿泊利用客）と出会い、お話を聞く機会があったことであり、もう一つは、大学入学時に起こった東日本大震災で「ボランティア」が身近にあったことです。その後、学生時代のインターン（シブヤ大学）や自治体との市民参加のワークショップへの参加経験を通して自分にできることを模索し、その中で周りの人びととの対話や関わりの楽しさ、そしてそれが「誰かのためになる」という実感から市民参加につながっていきました。その時に感じたのが、「自分の楽しさと社会貢献は両立するかもしれない」ということでした。

ところで、シブヤ大学は今年16周年を迎える市民大学の元祖と呼ばれる団体であり、コロナ禍の今でも毎月4～5つの「授業」を無料で開講しています。また、授業の企画・運営・開催もほとんどの過程がボランティアスタッフの手でつくられている点が特徴的です。ここで何よりも重要であるのが「自分が受けたい授業を企画する」ことであり、一人ひとりの楽しさを大切にすることを心がけています。

2020年のリニューアル以降には新たにミッションと課題、6つのキーワード（下図）を再構築し、日常生活の中で安心しながら学び続けられる空間を基盤に置きつつ、社会問題（まじめなこと）にも触れられる場づくりを目指しています。趣味・教養から普段は話しづらい社会問題までの幅広い学びを楽しみたい方、そして自分で学びの場をつくりたい方に、安心してともに学びあえる場を届けていくことを目指して活動を続けています

（参考HP：<https://www.shibuya-univ.net/about/>）

●ミッションと課題（2020年リニューアルver.）

ミッション：「自分の意志に基づいた先約や行動が社会に影響を与えることができると信じて、大きく考え小さく行動する人にとっての学び場を作る」

課題意識：大人が学び続けにくい社会

＋ 自分たちで社会をつくっているという実感を持ってない社会

●6つのキーワード

- 1) 学びはもっとゆるくていい
→授業の幅をもたせている（e.g. チェコの生活、鹿の皮でものづくり）
- 2) **まじめなことも話したい**
- 3) **同じ空間で誰かとともに学びあう**
- 4) **みんな**でつくる
- 5) **誰もが無料**で参加できる
- 6) **まちじゅうが学びの場**に変わる

まんたら 曼荼羅 トーク：誰もが学びたいと思う場は何だろう

当日は学びの組織づくりを含め多様な対話が行われましたが、ここでは「参加・継続しやすい学びの場」と「(大人の) 学びとは何か」という二つの点についてご紹介します。

まず、本企画のテーマでもある大人になっても継続できる学びの場のための意識として、参加のハードルのゆるさと企画・運営における配慮について話し合われました。深澤さんによれば、参加者やボランティアスタッフの学びの動機の多様性（例：新しい人・価値観と出会うため、息抜きのため）や参加の度合（例：シリーズ系で参加、年一回の定例イベントに参加）に幅があることが「シブヤ大学らしさ」です。また、渋谷という都会において人間関係が見えにくく一時的であること、そしてトークの起点となる人（中間点）を媒介する授業という形式という特徴も、まじめなこと・切実なことも話しやすさに影響を与えていると考えられています。一方で、必要な配慮として、初めての人や小学生でも参加しやすく伝わりやすいような企画構成や言葉の選定、多様な経験を有する方をボランティアスタッフとして巻き込む工夫がされています。

次に、「学び」というイメージそのものをどのように捉えるのかについて対話が盛り上がりました。実は、深澤さん自身が学校で経験してきた「受験のための学び」に対する強いアレルギーを抱いており、それに対してシブヤ大学での学びはより広く、人と会って話すことや何かにチャレンジすること、そして楽しむことが学びだと実感されたそうです。「遊び」にも近いシブヤ大学での学びでは、授業の作り手と学び手の認識は分離しておらず、ボランティアスタッフも「ボランティア」という感覚は少ないと考えられています。一人ひとりの楽しさや切実な熱い思い、個人的な経験が学びの起点となり、創造的な学びの場となること、そして多様な人びととの出会いの場が重要だと話されていました。

最後に、今回は市民一人ひとりがつくる「学び」と、その場を構築する人びとの多様な出会いの大切さを考えるひと時となりました。是非機会がありましたら、シブヤ大学の授業に私（岡本）も参加してみたいと思います。

（主な運営スタッフ：浜田、斉藤、別木、岡本 報告書担当：岡本）